

行田市民大学・行田市民大学同窓会 合同講演会

# 忍城開城とその後の甲斐姫

講師・三池 純正

平成31年1月17日（木）

13:30～15:30

ものづくり大学 建設棟2階 B2080教室

## 第1部 講演会（13:30～15:30）

開会

主催者あいさつ

講師紹介

講演

（途中休憩 10分）

質問

## 第2部 市民大学同窓会の紹介（15:40～16:00）

### 三池 純正（よしまさ）先生のプロフィール

歴史研究家、作家

1951年福岡県で生まれる

工学院大学工学部卒業

著書

「天秀尼の生涯—豊臣家最後の姫」

「女城主直虎と徳川家康」

「真田幸村と大坂の陣」

など多数

## 忍城開城とその後の甲斐姫

### 選ばれた忍城

**忍城を攻めるのになぜ水攻めでなければならなかったのか。**

関東には忍城と同じように周囲を沼池や湿地に囲まれた要害地形をもった城がいくつもある。例えば、忍城主成田氏の持城であった武蔵騎西城、三成らが忍城の前に攻めた上野館林城、武蔵岩槻城、武蔵川越城などは忍城と同様周囲を湿地帯に囲まれた微高地に城が築かれているが、いずれも水攻めなどされてはいない。

**水攻めを決めたのは秀吉**

秀吉は、六月十二日付の石田三成宛書状の中で、「忍城を水攻めにすることを命じた」と述べている。攻城軍は少なくとも六月五日には忍城を囲んだと思われることから、一週間後には秀吉の命を受け水攻めを決めたことが分かる。

**降伏していた忍城**

秀吉は六月十三日付けで石田三成に宛てた書状の中で、城内の者が助命を嘆願してきていると述べている。しかし、秀吉はその嘆願を認めず、さらには女・老人・子供の弱者を城の外に出した後に水攻めを実行することを重ねて命じている。

**水攻めありき**

秀吉が忍城について、初めから「水攻め」ありきという方針であったことを証する有力な証拠がもう一つある。それは、浅野長吉の皿尾城攻めにおける秀吉の対応に見ることができる。

**皿尾城の激戦**

城側と豊臣軍との間で行われた攻防戦が確かな文書で確認できるのは唯一浅野長吉らによる先の皿尾城の戦いのみである。

浅野・木村の軍はこの城を夜明けに急襲し、城兵の首三十を挙げ、残りの城兵を本城である忍城に追いやったが、激しい城側の抵抗にあい、浅野の兵にも多くの死傷者が出た。

### 水攻めは秀吉の政治力誇示のパフォーマンス

水攻めのための堤防工事が終わったと推定される七月四日、五日はすでに北条氏は秀吉に降伏しており、六日には小田原城も家康の手に引き渡されている。ここに、豊臣軍が忍城を攻める大義名分はなくなってしまった。しかし、水攻めの準備はそのまま継続されていた。小田原城開城の報は伝わってはいたが、水攻めは小田原城の開城に関係なく実行しなければならない秀吉からの命であった。そこに忍城水攻めに対する秀吉の真の目的が表れている。

## 甲斐姫の謎

### 会津蒲生家に預けられた氏長

蒲生氏郷時代の「蒲生家分限帳」によれば、成田下総守八千石、成田左衛門二千石とあることから、成田家当主氏長とその実弟泰親に合わせて一万石の所領を与えていたことが分かる。氏郷は二人を重臣として遇していたことがわかる。これだけの所領を与える以上、彼らにそれなりの城を与えなければならぬが、氏郷が氏長に与えたと思われる城は不明。

『成田記』には氏郷が氏長に会津を守る要害である福井城を与えたとあるが、会津若松近辺にはそのような城は実在しない。

### 伊達政宗襲撃事件

『氏郷記』によれば、厳寒の十二月十二日、氏郷が佐沼城に救援に行っている留守に、伊達政宗が会津に攻めてくるとの情報が寄せられた。会津若松の北にあって若松城を守る要衝塩川城の城将蒲生喜内は会津若松に早馬を立てた。

そこで、留守を守る重臣たちが話し合っ、かつての武蔵忍城の城主であった成田氏長らが適任であろうということになり、氏長に使いを出す、氏長は加勢を承諾してすぐに準備を始めたという。するとそこに「政宗の来襲は今夜ではなく明日になりそうだ」との知らせが再び塩川城から届き、氏長らは今夜の出発を止めて、明日の早朝立つことになった。

### 甲斐姫、秀吉の側室になる

『真書太閤記』では、甲斐姫の武勇伝を聞きつけた秀吉が甲斐姫に興味をもち、甲斐姫と対面し、そこで、甲斐姫の美貌と聡明さに惹かれ、甲斐姫を側室にするという話になっている。

『関八州古戦録』によれば、秀吉が小山<sup>おやま</sup>（栃木県小山市）の面々塚に立ち寄ったとき、那須の岡本清五郎が氏長の娘が美しくしかも剛毅で忍城の合戦で活

躍したと噂しているのを聞き、秀吉は甲斐姫を密かに召して会い、その後、京都に帰ってから会津に飛脚を送って、氏長の娘甲斐姫を側室にしたいので上京させるよう伝えたとある。

、新井白石が著した『藩翰譜』によれば、北条氏が滅び、秀吉が奥羽に向かっていたとき、氏長の妹が無双の美人だと聞いて、下野小山の百々塚<sup>とどつか</sup>の御陣に召してから、寵愛を深くした。この妹が折りにふれて兄の事を嘆いていることを聞いた秀吉は氏長を召し出して下野烏山の城を与えたという。

ここでは娘であるはずの甲斐姫が妹に変わっている。

#### なぜ、成田家は大名に復活したのか。

『真書太閤記』では、その結果、成田氏長兄弟が上洛すると、秀吉はさっそく謁見し、御家人同様に扱い、翌年には氏長に三万石（ママ）を授け、下野烏山の城主とし、弟左衛門にも五千石を授け、家康の旗本としたという。

唯一史実として確認できることは、氏長が忍城を失った翌年の天正十九年（一五九一）に下野烏山城（栃木県那須烏山市）主に秀吉から二万石（『真書太閤記』等にいう三万石は誤り）をもって任ぜられていることである。

これについては、『氏郷記』にも、「その後、会津家中より成田下総兄弟は上へ召し出され、下野烏山にて二万石を下さったと聞こえし」と、氏長らが秀吉に召し出され、下野烏山において二万石を授けられたことを伝えているが、その理由については一切言及していない。

#### 秀吉の側室 甲斐姫

『伊達世臣家譜』によれば、秀吉には十六人の愛妾がいたという。その中で少なくとも名前の判明するのは、淀殿、松の丸殿、三条殿、三の丸殿、加賀殿、姫路殿、かい姫、山名豊国の娘、おたね殿の九人である。

ここで「かい姫」とあるのが「甲斐姫」で、このことから甲斐姫が秀吉の側室であったことは間違いない。しかも、今日まで名前がちゃんと残されていることから、秀吉お気に入りの女性であったことは事実であろう。

#### その後の氏長

氏長はその後秀吉配下の大名として、文禄二年（一五九三）の朝鮮出兵に際しては釜山<sup>釜山</sup>に渡海し、奉行の増田長盛の手に属し釜山城の普請にあたるなど、家の存続のため懸命な努力を重ね、やがて秀吉から浅野長政の与力大名とされることになった。

### 甲斐姫最後の消息

甲斐姫は慶長三年（一五九八）の秀吉の死去まで側室をつとめていたことが確認できる。それを示す事実、秀吉が自らの死の五ヶ月前に行った醍醐の花見において歌を詠んだ女性の短冊の中に「かい」という名が見えることである。

### その後の甲斐姫

秀吉死後、淀殿と秀頼付きの局やその周辺の侍女、さらには、奥に勤める女性たちの中に「かい」という名の女性は当時の文献記録からはまったく見当たらないことから、甲斐姫が淀殿周辺にいたという確証はない。

また、甲斐姫がその後の成田家の領地である下野烏山にいたという記録などもなく、しかも成田家の菩提寺である熊谷龍淵寺にも甲斐姫の墓ばかりか成田家の過去帳もないところから、甲斐姫の消息はまったく分からないというのが現状である。

### 東慶寺の墓

鎌倉東慶寺の第二〇代住職天秀尼の墓の隣には天秀尼の乳母の墓がある。そこには、「当山天秀和尚御局」と彫られていることからそれは乳母の墓に間違いない。天秀尼は秀吉の遺児秀頼の実子であり、秀吉の孫にあたる人物である。

その母は成田氏とされているが、徳川家の記録には伊勢出身とある。この成田氏が甲斐姫で、その後、乳母となって鎌倉東慶寺に入ったという話があるが、東慶寺にはそのような伝承も文献も一切残されていない。

### その後の成田家

甲斐姫の実家であった成田家は甲斐姫の父の実弟泰親が家を継いだ、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦において家康につき、上杉の関東乱入に備えた功により、一万七千石を加増され、一度は三万七千石の大名になった。

だが、その三年後、泰親の後を継いだ重長の病死を機に、家督相続をめぐって家中は紛争し、それを知った幕府により、一万七千石が没収された。

その後、成田氏は大坂の陣にも出陣し、敵の首六人を取る活躍をし、家は安泰かに見えたが、その七年後の元和八年（一六二二）再び家督相続で家中は二派に分かれ抗争し、それを幕府に咎められ、城と領地を没収され、名門成田家は没落し、一族は四散してしまった。